

## 式 辞

中京大学の学部、並びに大学院研究科にご入学された皆さん、本日は誠にありがとうございます。中京大学を代表して、心より歓迎申し上げます。ご入学された皆さんを支えてこられたご家族や保証人の方々にも、謹んでお慶びを申し上げます。

大学生活のスタート地点に立って、皆さんの胸は大きな期待に膨らんでいることと思います。不安もあるでしょうが、この会場に集まったたくさんの仲間と一緒にいます。もちろん、本学の教職員も皆さんのサポートに全力を尽くします。安心して充実した学生生活を送ってください。

本学の母体である学校法人梅村学園の歴史は、創立者の梅村清光先生が、1923年（大正12年）に中京商業学校、現在の中京大学附属中京高等学校を設立したところから始まります。このときに定めた校訓が「真剣味」です。「真剣味」は、江戸時代に水戸藩に置かれていた藩校、弘道館の「文武不岐」の精神に基づくものです。「真」は真実や真理を探究する知育、「剣」は剣道や剣術、すなわち体育、「味」は人間味を育む徳育を意味しています。つまり、「真剣味」という言葉には、知、体、徳の三つを兼ね備えた人間としてたくましく成長していったほしい、という思いが込められているのです。

本学は、1954年（昭和29年）に中京短期大学として開学しました。その2年後に四年制の中京大学となりました。初代学長の梅村清明先生は、校訓「真剣味」をさらに具体化し、建学の精神「学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ」を掲げました。建学の精神には、スポーツマンシップの要諦として四大綱が示されています。「一、ルールを守る 二、ベストを尽くす 三、チームワークをつくる 四、相手に敬意を持つ」の四つです。四大綱はスポーツの世界だけではなく、私たちが普段、社会で生活していく上で忘れてはならない心構えを説いたものなのです。

開学以来、校訓「真剣味」、建学の精神「学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ」を変わらぬ教育理念として幾多の人材を送り出してきた中京大学は昨年、2024年に開学70周年の節目を迎えました。現在は、名古屋と豊田の2つのキャンパスに総勢1万3000名を超える学生が通う、中部地区でも有数の総合大学となっています。

皆さんはこの先、学業や課外活動などを通じてたくさんの人と知り合うことでしょう。出身地、好きな食べ物、音楽やスポーツなどの趣味、社会に対する考え方、みな一人ずつ異なりますが、そうしたさまざまな人と出会い、理解し合うことによって、私たちの視野は広がっていきます。大学というのは、単に勉学を修めるだけの場所ではなく、人間としてのそうした深みをつくっていくためのステージだと考えてもらえばよいと思います。

大学での生活は、高校までと比べると、はるかに自由です。学業についていえば、これまでは決められた授業を受けることが多かったと思いますが、大学では自分で科目を選択するのが基本になります。どういう時間割を組んでいくかは、何を学びたいのか、自分の時間をどう使いたいかによって大きく変わります。そのためにも、皆さん自身が「卒業後はこういう仕事につきたい」「こんな人生を目指したい」という目標を定めることが大事になってきます。

授業以外にも同様で、部活動や課外活動に一生懸命に取り組む、資格の取得に向けて頑張る、あるいは海外に留学するなど、選択肢はさまざまです。中京大学には皆さんの取り組みを支援できるような環境や設備が整っていますから、それらを大いに活用してもらいたいと思います。

ただ、何に向かうにしても、待っているだけでは可能性は広がっていきません。夢を実現させるためには、皆さん自身が主体的に動き、ゴールに向かってどういうルートを進むかをプランニングすることが大切です。教職員や先輩、友人から有益なアドバイスをもらうことはできるでしょうが、意志をもって決断するのは自分自身です。「自由に過ごせる時間がいっぱいできた」とばかりに楽なほうに流され、なすべきことを先延ばしにしていくと、大学生活はあっという間に終わってしまいます。貴重な時間を無駄にせず、充実した日々を送ってもらおうよう願っています。

ところで、大学における学びの目的は、さまざまな角度から物事を考えて解決する力、新たな価値を創り出す力を育むことにあります。大学での学修というとき、学んで習うという「学習」ではなく、学んで修めるという「学修」の字を使うのも、そうした意味が込められたものです。

最近では、スマートフォンやインターネットによってさまざまな情報が簡単に手に入るようになり、生成AIは画像も文章もとても上手につくってくれるようになりました。皆さんも日常的にそうしたデジタルツールを使っていることでしょう。その便利さを否定するつもりはありませんが、簡単に手に入れた知識や情報はまた、簡単に忘れてしまうものです。それだけでは、物事を解決する力や価値を創り出す力には結びついていきません。自分自身の手で試行錯誤を繰り返し、手間暇をかけて獲得した知識こそ、真に身に付くものになる、ということを忘れずにいてください。

知識ということでは、大学の図書館も大いに利用してほしいと思います。最近のベストセラーの一冊の中で、筆者は、ネットから得られるのは自分が知りたいこと、つまり「情報」であるのに対し、読書で得られるのは、知りたいことだけでなくノイズを含んだものであって、そうした余分な要素も交じり合ったものこそ「知識」なのではないか、と考察しています。

確かに、情報イコール知識ではありません。情報が氾濫している社会だからといって、知識に満ち溢れた社会ではないのです。誰もかれもが、いかに多く稼ぎ、いかに効率的に日々を過ごすかといった実用的な情報だけを手取り早く入手し、それ以外に見向きもしないようになれば、社会は息苦しさが増し、

人間関係からは潤いが失われていくでしょう。アメリカのトランプ大統領の言う「すべてはディール、取引だ」という考え方も、こうした延長線上にあるように思えます。

国際秩序は今、大きく揺らいでいます。そんな中だけに、世界のあちこちで起こっていること、私たちの目の前で行われていることをしっかりと見つめ、出来事の本質がどこにあるのかを見極める力をもつことこそ重要なのだと考えます。うわべに惑わされず、偏った情報や、悪意に満ちたフェイクニュースを見抜く情報リテラシーを培ってほしいと願います。

最後になりますが、大学生活をいかにいきいきと豊かなものにしていくかは皆さん次第です。可能性は無限に広がっています。何事にもあきらめず、全力を尽くし、自らを磨き続けていってください。これから始まる皆さんの大学生活が実り多きものでありますよう、心より祈念して式辞といたします。

本日はご入学、誠におめでとうございます。

令和7年4月4日

中京大学長 梅村 清英